

アトモスフィア

YMWY

関谷剛男*

1964年、東京大学薬学部を卒業後、引き続き大学院で浮田忠之進教授のご指導を仰ぎました。RNAの塩基配列解析は可能でしたが、DNAには全く手の出せない時代でした。それでもDNAのことをやりたいと希望し、「RNAをDNAに変換してみよう。」という無謀なテーマをいただきました。「君、何事も、やってみなくちゃわからんよ。」が浮田先生の口癖でした。もがきながらチャレンジして行くうちに、思わぬ方向へ道がひらけました。色々な局面を体験してきましたが、まさに先生のおっしゃるとおりでした。大いに感銘して勝手に盗ませていただき、「YMWY（やってみなくちゃわからんよ）」の略号で、私の座右の銘にしています。

科学技術振興機構の個人型研究「さきがけ」の「情報と細胞機能」領域の研究総括をしております。3年期限の研究提案を3年連続公募し、毎年10名前後を採択するシステムで、第1期生から第3期生まで合計すると30数名の若手精鋭を集めた研究集団です。年2回、研究報告会である領域会議を開いています。先日、最後の領域会議を札幌で行い、メンバーの研究者へのはなむけとしてYMWYの話を行いました。

この「さきがけ」研究は、若い優秀な頭脳にひらめいたアイデアを余計なことを考えずに、日本発のさきがけとなるような研究に展開してもらおうシステムで、極めて優れた研究体制です。一匹狼の研究者はよいのですが、若手研究者ですので多くの場合、所属機関ではボスの下にいます。そこで独自のアイデアでの研究になりますので、ボスの寛大なご理解をいただくことが必須となります。豊富な研究資金の大ボスの下で研究の歯車となっている場合は、勝手な研究は許してもらえませんし、また、そのような研究室からの応募は、ボスの傘の下のどこかで見たような提案になってしまいます。一方、優れたユニークな研究提案のできる若い研究者のいる研究室のボスは、間違えなく独立の研究を許す余裕、度量をお持ちです。そのようなボスがまだまだ日本に沢山いらっしゃることを知ることは「さきがけ」研究のおかげです。「さきがけ」研究のシステムが、流行にとらわれた偏った研究分野に集中せず、広い研究分野に適用され、今後とも大いに推進されることが重要です。日本の独創的な研究の誕生とその維持に大きく貢献することは間違いないと考えます。

この様な「さきがけ」研究で一番大事なことは、研究で壁にぶち当たった時のひらめきです。このひらめきで壁を破るためにはYMWYが必須です。幾人かのアドバイザーの先生方に、研究提案の採択審査、その後の進捗評価を厳しくしていただき、適切なご指導をお願いしています。その先生方から、最近の若い研究者はYMWYの研究をしない、うまく行くことがわかっている研究でないといと手を出さないとの声がありました。考えたとおりに研究が進み壁にもぶつからずに、順調に進む研究は、本人はすごいだろうと自慢かも知れませんが大間違えです。ヒトが考えたとおりに進む研究は所詮たいしたものではなく、必ず同じことを考えている他人がいて、2番、3番煎じの結果になります。これまでヒトが考えつかなかったことをやれば必ず壁にぶつかるはずで、誰も知らなかった自然の謎に直面したことの確認になります。喜ぶべきことです。そこで悩み苦しんだすえ、ひらめいたことはYMWYのはずです。やってみなければわからないことが、本当の壁を破るブレークスルーとなるわけです。

若い研究者が折角ひらめいても、その頭の良さゆえにうまく行くとはいえないと勝手に判断して、チャレンジしないのでは並の研究者になってしまいます。特に自然を相手の生化学研究の皆様には、ひらめいたことに対してYMDD（やってみなくちゃだめだ）をお願いする次第です。人知は自然にはかないません。YMDD（やってみたけどだめだった）でもかまいません。YMWY精神で挑み続ける姿勢が、未知の世界への扉を開くと考えます。

*三菱化学生命科学研究所